

ジェンダー「平等」を達成するには
—『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較より—

コース	国際文化コース
学籍番号	160058
氏名	一平 みずき
指導教員	加藤 千博

イギリスはジェンダー平等が進んでいるとされる国の一つである。実際に世界経済フォーラム (World Economic Forum) が発表した The Global Gender Gap Report 2018 によると、ジェンダーギャップ指数に基づくランキングにおいてイギリスは 149 か国中 15 位であり、上位に位置している。ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1764-1817) は、そのようなジェンダー平等が進んでいるとされる国イギリスを代表する作家の一人である。彼女が生きた時代から約 200 年経った現代でも、彼女の作品はジェンダー平等の観点で多くの議論が交わされている。また、ヘレン・フィールディング (Helen Fielding, 1958-) の『ブリジット・ジョーンズの日記』(1996) のように、オースティンの作品を元にした作品も多く登場している。そこで本論文はオースティンの作品の一つである『高慢と偏見』(1813) とフィールディングの『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析をすることを主題とした。そしてその共通点や相違点から、イギリス社会にあるジェンダー平等における課題を明らかにし解決していくには何をすべきなのかを探ること、そしてそれを参考として日本におけるジェンダー問題の改善策を検討することが本論文の目的である。

本論文ではまず、『高慢と偏見』と『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を行い、作品が描かれた時代背景やジェンダー平等がどのように描かれているのかを論じた。その後、両作品を比較分析し、共通点や相違点よりイギリス社会におけるジェンダー平等の課題や進歩した点を明らかにした。そして、それらを踏まえた上でイギリスおよび日本でジェンダー平等を達成させるには何をすべきなのかを検討した。

第 1 章では、『高慢と偏見』の作品分析を行った。1800 年前後のイギリス社会では、現代にも通じるようなフェミニズムの思想もあった一方で、女性は男性よりも劣っているという考え方がまだ広く浸透しており、それは教育や結婚などに影響を与えていたことが明らかとなった。この社会の様子は、主人公エリザベス以外の 4 組の夫婦を通して物語で描かれており、特にシャーロットとコリンズの夫婦からは女性が生活するうえでの困難と男性の社会的な役割をよく読み取ることができた。エリザベスとダーシーからは恋愛結婚をしたことで精神的に対等な関係を築けているものの、結婚後は結局、経済的にダーシーに頼って生きていくことが分かった。そのため、結果として『高慢と偏見』はジェンダー平等と不平等が混在している作品である。

第 2 章では、『ブリジット・ジョーンズの日記』の作品分析を行った。作品が描かれた 1990

年前後のイギリス社会では、1800年前後と比べ、女性に参政権が与えられるなどジェンダー平等は大きく前進した一方で、フェミニズムは終わったというポストフェミニズムの考えが広まっていることが明らかとなった。作品では主人公であるブリジットの友人らを通して、頑強なフェミニストや社会から差別の目を向けられる同性愛者、女性は早く家庭に入るべきという古い考えを持つ人など、ジェンダー平等において様々な考え方が混在する様子が描かれていた。また、ポストフェミニズムに関してはブリジットを通して描かれており、これは第二波フェミニズムの影響を受け、生き方を変えた母親と対照的であった。また、相手役であるマークはジェンダー平等について関心を持っていることが明らかとなった。そのため『ブリジット・ジョーンズの日記』におけるジェンダー平等の描かれ方については、単にブリジットを通してポストフェミニズムの状況を描いているのではなく、マークのようなジェンダー平等に関心を持つ新しい男性像や、ブリジットと母親の関係を通しジェンダー平等を求め続ける重要性が描かれている。

第3章では、両作品の比較分析をしたうえで、ジェンダー平等にむけて何をすべきなのかを論じた。両作品の相違点として仕事や結婚、そして同性愛者の登場があることが明らかとなり、この変化はジェンダー平等において進歩した点と考えることができる。一方で共通点として、社会からの圧力や家庭のかたち、またほとんど白人しか登場しないことが挙げられ、これらは長い期間イギリス社会において残り続けている課題であると推察した。そしてこれらを解決していくには、男性への取り組みや教育を強化すること、そして人種問題を含めあらゆる面の不平等をなくしていくことも、ジェンダー平等をはじめ、全てにおける「平等」を促進させるために重要であると結論付けた。また、ジェンダー平等が遅れているとされる日本については、ジェンダー問題への意識の低さが明らかとなり、それを改善して平等を促進させるには、教育やメディアを利用して意識的な面と、男女共同参画社会基本法の改善の制度的な面のどちらにも取り組んでいくことが重要であると結論付けた。

本論文では、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』とヘレン・フィールディングの『ブリジット・ジョーンズの日記』の比較分析より、イギリス社会におけるジェンダー平等の課題を明らかにし、その改善策を考察した。また、それを参考としながら、日本におけるジェンダー平等について論じた。その結論としては、男性へ向けた取り組みや教育に力を入れること、そして「平等」に多角的に取り組むことで、イギリスおよび日本において効果的にジェンダーを達成させることができると導きだした。以上のように、時代が異なる文学作品の比較より社会におけるジェンダー平等の課題を明らかにし改善策を示したこと、そしてそれを参考として日本のジェンダー問題に言及したことに本論文の意義がある。

村上春樹『1Q84』における主題

コース	国際文化コース
学籍番号	160140
氏名	岡 あずさ
指導教員	加藤 千博

村上春樹は現在日本でもっとも有名な作家である。デビュー作である『風の歌を聴け』（1979）で群像新人文学賞を受賞して以来その人気は継続し、彼の作品は世界中で多くの人に親しまれている。翻訳家としても活躍し、数多くの有名作品の翻訳を行っている。彼の初期作品は社会とのかかわりを持たない作品が多かった。しかし地下鉄サリン事件などの日本での大きな事件をきっかけに、作家として、作品を通して社会へコミットすることを意識し始めている。その変化後の代表作の一つとして『1Q84』（2009-2010）があげられる。本論では『1Q84』に込められた作者のメッセージを明らかにすることを目的とし、本作における複数のテーマの中から最も重要なテーマを見出すことが本論の主題である。

第一章では村上の作品の評価と特徴について論じた。日本での彼の作品に対する評価は高評価と低評価に顕著に分かれている。低評価の理由として、それまでに高評価を受けていた私小説、純文学といった文学のジャンルから彼の作品が外れていたことがあげられる。現在では彼の作風が一般化し、独自の作風によって高い評価を受けることが多い。欧米では、彼の作品は新たな日本文化としてとらえられている。彼の作品が読まれ始めた1980年代は漫画やアニメなどが世界に普及した時期で、彼の作品はそれらと同様、日本文学の新たな一面としてとらえられた。一方中国では、彼の作品には日中に関する歴史の描写が多く登場するので、作品への着眼点が歴史であることが多いと考えられる。また、彼の作品の特徴として、日本文学らしさの欠如があげられる。村上は子供の頃から欧米の文学を好み、純文学、私小説といったそれまで日本で主流だった文学を書くことを拒んだ。また、西洋文化が多く登場することや、ほとんどの登場人物が集団、組織を大切にするという日本人の特徴が当てはまらないことも日本文学らしさの欠如の一因である。

第二章では『1Q84』に登場する親子について論じた。本作で登場する主な親子にはそれぞれ確執があるのが特徴である。主人公の一人の青豆の家族は「証人会」という宗教団体に所属しており、彼女もその一員だった。しかし彼女はそれを苦痛に感じ、子供のころに家を出て以来家族とは会っていない。脇役の一人のフカエリは父親が宗教団体「さきがけ」のリーダーであるが、彼女も青豆と同様、宗教団体から抜け出し、知り合いに引き取られる。もう一人の主人公の天吾は父親に育てられたが、父親の仕事のやり方や、性格的な不一致により、高校以後顔を合わさないようになる。しかし、天吾は父親が亡くなる直前に父親に会いに行き、そこで二人は和解に近い状態に至る。天吾とその父親の関係は村上自身の親子関

係と似ている点が多い。村上と父親は、性格上の問題や、村上が父親の戦争に関する事実について勘違いしていたことで溝が生まれ、ほぼ断絶状態に陥っていた。しかし、父親が亡くなる直前に和解に近い状態に至り、関係を改善することができた。天吾とその父親は、村上と彼の父親を反映した親子であると言える。

第三章では『1Q84』における善悪の在り方について論じた。青豆と老婦人は親しい友人や家族をDVによって亡くした経験から、DVを行う男性たちを憎み、彼女たちは暗殺という形で彼らに制裁を加えている。作中ではDVの描写が過激に描かれるため、読者は暗殺という制裁を正義ととらえる可能性がある。また、宗教団体「さきがけ」の深田保は、少女たちをレイプするという犯罪行為をしているにもかかわらず、完全な悪としてとらえることが難しい。なぜなら、「さきがけ」で信じられている超常現象を青豆や天吾が経験したり、深田が青豆に寄り添うような発言をすることによって深田に信憑性が生まれるからである。このように本作では善悪がかなりあいまいに描かれている。作者は、悪に盲目になることの恐ろしさを読者に伝えたかったからあいまいな描き方をしたのだと考えられる。一方、善悪をあいまいに描くことは、読者が悪に気づくことができず、むしろ本来は悪のものを善としてとらえてしまうという問題点がある。

第四章では作中で描かれる記憶について論じた。村上の作品では戦争に関する記憶が描かれることが多い。本作では青豆、天吾の父親、タマルが戦中、戦後の経験の記憶を語るシーンが描かれている。記憶の描写は間接的で、感情抜きに描かれるのが特徴である。その特徴によって、記憶はその人のものだけではなく、多数の人との共通の記憶としてとらえられる。村上は戦争経験者である父親の死をきっかけに戦争や歴史の記憶が失われることへの危機感を抱き、天吾とその父親の間の記憶の伝承を描いたのではないだろうか。また、記憶は人々の善悪の認識にも影響を与える。青豆や老婦人がDVを絶対的な悪ととらえるのは、親しい人をDVで亡くした記憶が原因となっている。暗殺を悪ととらえられていない彼女たちを描くことによって、戦争や暴力の記憶のない人々が、本来悪のものを悪としてとらえられないことの恐ろしさを村上は描いている。

本作における親子や善悪の描写は記憶というテーマにつながり、記憶が本作の最も重要なテーマだと結論付けられる。そのテーマを描くことで、戦争や歴史についての記憶が失われることに対して作者は警鐘を鳴らしているのだと考えられる。そして記憶の継承の重要性を読者に伝えようとしていることが読み取れる。彼が危機感を覚えたきっかけとして彼の父親の死があり、その経験は登場人物の一人の天吾に反映されている。彼の作品で記憶が描かれる作品はいくつかあるが、その中でも本作は彼の経験、考え方が顕著に表れている作品と言える。本作は戦争や歴史の記憶の重要性に読者が気付く機会になり得ると考えられ、そのことを見出した点に本論の意義がある。

イギリスにおける中国式庭園との文化交流に関する研究

－ウィリアム・チェンバーズと王立キュー植物園を例に－

コース 国際文化コース

学籍番号 160358

氏名 鈴木 秀和

指導教員 加藤 千博

今日のイギリスの代表的な文化の一つとして、庭園文化が挙げられる。イギリスの各都市部や大学などの研究機関には植物園があり、かつての貴族の邸宅には広大な庭園を持つものもある。また中国でも、庭園文化は伝統的な文化として位置づけられており、中国全土に渡って多種多様な庭園が存在する。実際に、筆者がイギリスと中国を訪れた際にも、両国でこれまでに数多くの庭園が造られ、その多くが文化的遺産として現存していることを確認できた。さらに、庭園の構造や庭園内の建築物の様式などはイギリスと中国で相違点が多く見られると感じた。

本論文は、17世紀後半からヨーロッパで広く流行した中国趣味の影響を受けて、イギリス人が多くの相違点がある中国の庭園文化に興味を持ったために文化交流が起き、特徴的な庭園文化ができあがったことを明らかにすることが目的である。そのため、イギリスと中国双方の庭園や建築及び東西文化交流に関する先行研究、造園家による著作物の作品分析を通してこれを証明したい。そこで本研究では、大英帝国時代の植民地からの植物を多く所有しているロンドンの王立キュー植物園に焦点を当てることにする。また、この造園や建築を担当した建築家ウィリアム・チェンバーズは中国式庭園のどのような点に魅力を感じ、中国式庭園の要素をキュー植物園にどのように導入したのかについて考察し、その意図を推察する。

第1章では、イギリスと中国それぞれの庭園文化の特徴や成立過程について整理した。イギリスでは、18世紀に古代ローマの風景画やイギリスの自然風景をモチーフにした風景庭園が造られるようになった。この風景庭園はイタリアやフランスの整形庭園とは異なり、曲線が多用され、人工ではあるものの自然の風景のような庭園であることが特徴である。一方中国では、庭園は漢王朝時代に造られはじめ、成熟期を迎える清時代には、江南の風景や神仙思想の世界を再現した庭園が造られるようになった。この中国式庭園の特徴は、古代思想や現存する景勝地をモチーフにし、人工の建築物と自然の調和を重視していることである。またこの章では、時代背景として17世紀後半からヨーロッパで流行したシノワズリと呼ばれる中国趣味についても触れた。イギリスにおいて中国趣味は、室内における家具や内装から屋外の庭園や建築まで幅広く影響を与え、庭園に関しては多くのイギリス人がその不規則性を重視した中国の庭園に興味を示したということが明らかになった。

第2章では、王立キュー植物園の成立過程及びウィリアム・チェンバーズの生涯、彼と中

国との関わりについて整理した後、チェンバーズの著書である *A Dissertation on Oriental Gardening* (1772) を用いて、彼がどのような中国式庭園の要素に魅力を感じ、キュー植物園の庭園に導入したのかについて考察した。王立キュー植物園は、プラントハンターと呼ばれる人たちによって世界中から集められた多くの植物を栽培し、研究をしているという植物学的な側面においても東洋との繋がりを持つ植物園であることがわかった。チェンバーズの *A Dissertation on Oriental Gardening* をはじめとする著書からは、「自然性と人工性の調和」、及び「四季」による場面分けという二点に魅力を感じ、キュー植物園の造園においてそれらを導入したと読み取れた。さらにこの中国式庭園要素の導入に関して、チェンバーズはブラウンの風景庭園を批判するため、イギリスの帝国としての強さを対外的にアピールするため、当時流行していた中国趣味を批判するため、の 3 つの意図があったと推察された。

第 3 章では、中国要素が導入された王立キュー植物園の現代社会における役割、及び中国式庭園要素が導入された庭園のイギリス国内やヨーロッパ諸国への影響について考察した。ブラウンによってチェンバーズの取り入れた中国式庭園要素はわずかなものに減ってしまったが、キュー植物園は植物学的な側面と建築学的な側面の双方から帝国主義の歴史など幅広い分野を学ぶことができる場所として、現代のイギリス社会において大きな役割を担っている。このような中国式庭園要素が導入された庭園はイギリス国内にいくつか存在し、それらの「イギリス中国風庭園」はイギリス国内だけでなく、フランスやドイツといった他のヨーロッパ大陸諸国にも及んだことが明らかになった。

結論としては、ウィリアム・チェンバーズによってイギリスと中国の庭園文化交流が王立キュー植物園で起き、それはイギリスの他の庭園及びヨーロッパ諸国へも影響を及ぼしたことが言える。チェンバーズは、自身の中国での滞在にて中国式庭園や建築に魅力を感じ、中国趣味が流行していたイギリスの王立キュー植物園に「自然性と人工性の調和」と「四季」の変化を意識した上で、四季による風景の場面分けやそれらの自然風景と中国式建築物を調和させるという中国式庭園の要素を導入したということが考えられる。最後に、本論文は、ウィリアム・チェンバーズの中国式庭園要素導入の意図としていくつかの説を提示したこと、及びこの文化交流を「イギリス中国風庭園」としてイギリス発祥の特徴的な庭園文化であると論じたことに意義がある。

日本で喫煙規制が進まない背景を探る

—イギリスの禁煙法を参考に—

コース	国際文化コース
学籍番号	160397
氏名	滝澤 祐人
指導教員	加藤 千博

近年、喫煙を規制する動きが世界的に高まっている中、日本の喫煙規制は「世界最低レベル」と WHO によって評されている。日本はたばこ規制枠組条約 (FCTC) を批准しており、公共の屋内空間を法によって禁煙化することが求められてきたが、2018 年に健康増進法が改正されるまで、罰則付きの屋内禁煙化が導入されることはなかった。さらに同法は屋内での喫煙が可能となる例外を多く認めているために、例外なき屋内禁煙化が必要という原則を示している FCTC のガイドラインに背くこととなった。一方で、屋内全面禁煙化を実行しており、喫煙規制が整備されている国の一つとして挙げられるのがイギリスである。2007 年より、イギリスでは禁煙法によって公共の屋内空間での喫煙が規制されるようになり、同法の導入後、実際に国民の健康面に多くの改善点が確認された。本論文では、イギリスの禁煙法を参考にして、日本の喫煙規制において不十分と考えられる点を提示した。日本で喫煙規制が他国ほど推進されず十分に至っていない原因や、その社会的背景を探ることが本論文の目的である。

第 1 章では、日本の健康増進法改正がどのような効力を持ちうるかを検証した。前述の通り、同法は屋内禁煙化の対象外となるケースを多く認めており、改正法による屋内禁煙化の対象となる飲食店は全体の 2~3 割に留まるということが確認できた。国民の健康増進を目的とするには、日本における喫煙規制の現状は不十分なものであり、また FCTC のガイドライン、および IOC と WHO の推進する「たばこの無い五輪」というポリシーにも反していると考えられる。公共空間の禁煙化に加えて、例えば禁煙外来治療費を補助するなど、喫煙率および受動喫煙の被害を減少させるような、根本的な施策も必要であると論じた。

第 2 章では、法による屋内禁煙化を行い国民の健康に大きく寄与した好例として、イギリスで 2007 年に施行された禁煙法を中心に、イギリスにおける喫煙規制を分析した。イギリスは 2004 年の FCTC 批准が大きなきっかけとなって、たばこに関する規制が多く設けられるようになり、広告の禁止やプレーン・パッケージと呼ばれるパッケージの統一化、たばこ税の引き上げなどが行われたことが確認できた。中でも、2007 年に施行された禁煙法は高い順守率を獲得し、国民の健康改善に大きく寄与していることが確認できた。今後長期的な分析によって、禁煙法のより確実な影響を測ることが可能となると考えられる。また、日本では健康増進法の改正に際して、飲食店内における喫煙規制の是非やその方法について議論が続いているが、イギリスのパブの事例を参考にすると、有効な規制の方法が見えてくる

のではないか。

第3章では、前章までの分析を踏まえて日英における喫煙規制を比較した。屋内喫煙の可否は受動喫煙防止の観点から見て非常に重要な点であり、日本は屋内での喫煙規制をより強化する必要があると考えられた。その他、たばこのパッケージや価格に関する規制を強化することで、健康の増進および税収増などの恩恵が得られると論じた。東京オリンピックの開催を控え、一刻も早い規制の強化が必要であるにもかかわらず、日本で喫煙規制が他国ほど推進されない背景にあるものとして、国とたばこ業界間の主に金銭面における癒着の存在が大きいことが確認できた。したがって日本が今後 FCTC 批准国としての水準に喫煙規制を合わせるためには、たばこによる大きな収入を維持しながらの規制強化が求められていると論じた。そのためにはたばこの大幅増税が適切で、なおかつ国民の健康改善にも寄与できる方法であると考えられる。しかしながら、FCTC 批准国として求められるのは、国とたばこ業界との癒着を解消することであり、それが一向に実現できていない背景には、国会内における喫煙者の多さ、および男性優位の社会構造の存在も関係していると結論付けた。

本論文では、日英でそれぞれ異なる受動喫煙防止法を比較して、日本の喫煙規制の現状が不十分であることを示し、イギリスでの事例を参考に、例外なき屋内禁煙化、パッケージにおける規制の強化、たばこ税の引き上げという改善策を提示した。日本で喫煙規制が他国ほど推進されない背景にあるものとして、国とたばこ業界間の主に金銭面における癒着の存在が大きいため、たばこによる収入を維持しながらの喫煙規制を強化しなければならないという日本独自の事情が明らかとなった。そのためには、たばこ税の大幅な引き上げが有効であると判断した。FCTC 批准国として、またオリンピック開催国として、たばこ業界との癒着を解消し喫煙規制を強化する必要に迫られながら、それを整備する際の妨げとなっている日本独自の社会的背景を提示したことに本論文の意義がある。

ケネス・グレアム『たのしい川べ』における
動物ファンタジーとしての役割と効果
—諷刺する動物たち—

コース	国際文化コース
学籍番号	160583
氏名	干野 香月
指導教員	加藤 千博

ファンタジーは英国を代表する文学ジャンルの一つである。中でも十九世紀末から二十世紀に書かれたヴィクトリアン・ファンタジーと呼ばれる作品群は、現代のファンタジー文学の源流として今も世界中で読まれ続けている。1908年にケネス・グレアムが発表した『たのしい川べ』（原題：*The Wind in the Willows*）もヴィクトリアン・ファンタジーを代表する作品であり、モグラやヒキガエルといった動物たちを主人公に川辺の自然風景や友情、冒険を描いている。現代では学校用教材や絵本、映画、ミュージカルなど様々な媒体で幅広い世代の読者に親しまれており、本作品の影響を受けて動物を主人公とした物語を描いた児童文学作家も多く存在する。なぜ本作品は現代でも語り継がれ、子どもだけでなく大人の読者をも惹きつけ続けているのだろうか。その背景には他のファンタジー作品と差別化される要素を創造したからではないだろうか。本作品が同時代における他のファンタジー作品と大きく異なる点とは擬人化の度合いが高い動物を作品に登場させた点ではないかと思われる。そこで本論文では諷刺を軸にケネス・グレアムの『たのしい川べ』が動物ファンタジーとしてどのような役割および効果を持つのかを明らかにする事を主題とし、動物の視点を通して人間社会がどのように諷刺されているのかを示す事、その後の児童文学作家や現代の児童文学にどのような影響を与えたのか、その効果を明らかにする事を目的として分析を行う。

第1章では、「動物ファンタジー」という文学技法について、その定義付け及び役割について論じる。まずファンタジー文学の定義付けを行い、本論文においては、妖精や魔法などの非現実的要素を扱い、物語内部で現実の出来事や事象を反映させ、リアリズム文学の技法を用いて描かれた物語文学をファンタジー文学と定義する。中でも本作品は日常を舞台に魔法や超自然的要素を扱う「日常のファンタジー」というファンタジー作品に区分される。次に「動物ファンタジー」の定義付けを行い、擬人化された動物を用いて人間の本質を描き、読者に諷刺と教訓を示す作品を動物ファンタジーとして定義付ける。最後に、本作品における擬人化された動物の特徴的な役割として「文明の利器を用いた点」「人間との対等な関係を示した点」「衣服による階級や個性の違いを表した点」を挙げる。

第2章では動物の視点を通してどのように社会が諷刺されているのかを論じる。まず諷刺の分類方法として、穏やかで共感の視点を含む「ホラチウスの諷刺」と辛辣で人間社会への

侮蔑を含む「ジューヴィナル的諷刺」の二種類がある事を確認する。まず自然の崩壊については、動物の人間に対する否定的態度から、人間社会に対する厳しい批判の視点を含むジューヴィナル的諷刺であると解釈できる。次にボヘミアニズムに着目し、作中で描かれるパン神および川ネズミの放浪欲求は、穏やかで共感の視点を含むホラチウスの諷刺であると解釈する。次に伝統社会構造の変化として、階級転覆の物語構造と女性不在の設定に着目し、それらが穏やかで共感的なホラチウスの諷刺である事を論じる。最後にモグラと川ネズミの牧歌的川辺生活やヒキガエルの荒唐無稽な冒険には、グレアムの動物たちに向けた穏やかで共感的視点が込められていると解釈できる事から、本作品はホラチウスの諷刺作品に分類されると判断する。

第3章では本作品が動物ファンタジーとしてどのような位置付けであり、現代においてどのような効果を持つのかを論じる。まず英国国民文学ジャンルである「ファンタジー」の側面からどのような効果を持つのかを分析し、イギリス文化的特質が作品に反映され、現実と向き合う方法を提示する事、自己同一性の探求を扱う事、という二点を通じて大人と子ども読者両方に向けた主題がある事を確認する。次に喪失した美の再認識としての効果を分析し、ここでは自然の美しさと素朴な日常の美しさの描写を通してそれらの回復を願ったのではないかと解釈する。最後に本作品出版直後の作品評価や、後代の児童文学の流れを基に本作品の効果について分析し、普遍的な人間の不安や葛藤を動物に託す形でそれらの克服の方法を提示している事を論じる。

本論文では諷刺を軸に、『たのしい川べ』における動物ファンタジーとしての役割と効果について論じる。擬人化された動物たちは人間の本質を示す事で読者に諷刺と教訓を示し、その諷刺からは穏やかで共感的なまなざしが見られ、子どもだけでなく大人の読者に向けたメッセージが存在する事を確認する。これを踏まえ、『たのしい川べ』の動物ファンタジーとしての役割と効果とは、擬人化された動物を通して歴史的危機に直面する現実社会を、穏やかで共感的な態度で諷刺する事を役割とし、人間の不安や葛藤を動物に託す形でそれらの克服方法を示す事が効果であるとして結論付ける。

グレアムが『たのしい川べ』の中で描いた独自の諷刺要素とその諷刺方法を明らかにし、古典作品に収まらない、現代に通底する普遍的な価値を持つ作品である事を提示した点に、本論文の意義がある。